

薩摩風土記

下

和書門			
二九〇五四	號	類	
一〇三	函		
一三	架		
三	冊		

內閣文庫		
二九〇五四	號	類
三	冊	
一三	架	
七	函	

內閣文庫		
番號	和	29054
冊數	3	(3)
函號	175	137



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



敬
部
印
文
庫

圖書
文庫

圖書
部
印

丙一〇一八六號

深川文庫

永輝

加法林

加法林

加法林

今私泉

手田

萬七千四百九十九

萬五千三百九十九

萬七千四百九十九

萬五千六百九十九

萬五千九百六十九

一 三万六千二百廿五石

清津圖書及

一 三万三千七百六石

嶋津新及

一 三万六千六百九石

清津山城及

以上由親類元正收領一人名元

由家門持可方

一 三万七千二百廿五石

肝身源正及

一 三万六千四百石

嶋津壺及

一 三万七千四百廿五石

吉入三及

一 三万六千二百廿五石

嶋津至及

一 三万四千四百廿五石

小揚帶力及

一 三万四千四百廿五石

小令小腰及

一 三万五千六百廿五石

入来院在見及

三子百五十八石

一 崔田

柳山左系友

三子百六十八石

一 愚木

鳴津内膳友

三子百六十八石

一 伴司

鳴津厄冲友

三子百五十八石

一 新地

鳴津内膳友

三子百五十八石

一 花園

鳴津大学友

三子百九十八石

一 市成

鳴津衣振友

以上是設以一家門元

鳴津家山家老中多取五

川上友 一 吉島友 一 柳山友

新地友 一 二階堂友 一 丸津友

伊集院友 一 赤松友 一 吉田友

市田友 一 町田友 一 伊集院友

系系友 一 強田友 一 鳴津知友

系川友 一 鳴津矢柄友 一 山号友

一 諸津子左史及 一 高橋友 一 木令友

以上世流八山大名 上方中出

外言 西田家 人計士 一 三万九千人余 元國之村 今土

士惣人数 一 一万七千人余

以上言 三松三万二千 北百甲七石 北中七石 六合

外城流

言 松三万四千四百 宿本在寺中 寺外三合

会 薩隅日 左之 諸 振球合

八松七万二千八百 露本在寺中 三合四石

外城在中 言 松三万五千四百 五松三合三合 八石

神社 住者 言 三万五千 五松三合

山 漁川島 今 三之百万 種之 七島 七石

教如 七石 以之 是也 何能 七石 七石

知此 七石 高 北利 七石 外 七石 七石

言 教志 七石

系 國寶 物 何 七石 一 七石 七石

心 實 七石 人 七石 七石 七石 七石 七石

九 尺 中 四 尺 寸 上 七石 天 同 七石 思 七石 七石

一寸五分の長さありて白く丸まき端あり

一 同八段大井乃水ありて子持あり

一 韮朝の紙とて此の紙

一 此の紙は鎌倉の具足義久の関ヶ原御用

乃渡りあり

一 此紙乃水かふと刀太刀

一 杉紙の御筆

一 皇利家代の御朱印

一 秀吉の御筆

東照文御筆

一 秀吉の御用と罐子 同冊翔樹乃御用あり

一 此の紙あり

一 湯成院乃色紙

一 定家此御製杉朝の寛永御筆別紙あり

一 筆

一 別紙同大石大矢 渡同紙子のありて幕朝

一 せん古瓦のあり

一 せんおの記

古筆唐書の道多秘知なり

まろく令とありて

一 柳子昂の屏風 五物

一 董志少きの屏風 一 李舟の筆

一 らんさいの筆 一 滝北の筆

一 秦の始皇の筆

一 馬よりの筆 一 古法眼の筆

一 こどりの筆 一 舟の筆

一 きりぎりすの筆

一 てんてんてん

一 探出尚信の筆の秘教知れり

一 薩長のみ筆

一 重舟の筆 秋月ありて

一 探元ありて

一 景の筆

一 若山崎の筆 後官 瑞 齋 戸 口 一

一 山家人の筆 行舟の筆 進 友 一

一 舟の筆 舟の筆 舟の筆 舟の筆

行れりくくすまおくくすくす治つて其は
 くす治つて又あやくだんは病るぞと
 どもんりくすくす治つて其は
 一くくす治つて

眼病諸令て其は

一 上野氏士布山平八及島之也小児着尻
 たりたりとくくす治つて其は
 一 治治者者也一並り初たり麻純是くせ
 なるま中一云古とたりたり

一 一 中々 一 一 一
 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一
 一 一 一 一 一

ありしはくたりとなく出づる中

琉球友誼の記

一 今小原友より 崖ハ如んし一して 見よ之

各派治之記

一 若山より三条小派治宗道の古地所々々

右井戸内々 派治之を以て 物する事あり先

年如河延 重右衛門及世間々 康々 時々

如一持々 時々一 事とす

一 又右北より 派年所 南北 在地所々 是々

今より 派治を以て 事々 世間とす 是

三々 是のく

一 又元平是も 柔もあへ 所々 乃 乃 了 同所

あり丸田北隈工心——と雖も在患のあり
小田正房のありとあれらちうとく此神々
人形は是れをさうし先柄巻さうし刀巻
まじりてく各人何まじりてく——さかた
所——中あまきりあり

さつてくちやけ

多政四子己正月廿日暮六時過十所北新子や
南角小風小東浦——りて十所中所家
海らに焼拂ひ終六時火落りよふ——

むも怪我人しなきねふりて二日屋形より
終り、かゆききりり——此よるるもの下
さうて火あり——まきまき屋をアハありや
神紙く火も元つまきくふ火此有り屋根
ぬけ急火くまけ付、けとまき、あき、問屋る
才所より起るもありてとるうらてのあり
嘉人着まつて入申しものハ、嘉子火入りて丸
焼くぬりてく、くは火より日ありてか先
中へハ焼ぬりて急終かみ出中りあり

死ん屋中乃事いふのくは上所新屋
もたふ一洞屋へ付子そくくくみく
し中此六日か 筆新搦西角油屋此田
差七ると中此のこのくを越焼く有此田
二ふん垂飛ノ云水之よりまーッんや清
付ト右此宅へ引くはう さらん手難用
あく 居る 中此 か日く 新屋旅出つた
出らんせく一ヶ年 三皆四きー 考るー
此書ト 亦村木井繩切らるるい一ふん

遊上のこのハきひーく 出替めさるぬル
あふやうさう

阿久根の塩田此事

旧前不きーら新此記

一 田の中不塩る記ある海あり 廻りを兼
田中此くん秘塩記ある之 民士此此志か
おつうな塩何さのふ常此ーかさう
世思く田の中にあくと何う大乃 魚ん
海の中、まある 考るおん如

一
獅子橋の先を東に歩くと
船が引かるとなる

天草此半

一
すゝくなる此三振奈里 東山よりなる内
瀬戸三ツ河よりん戸此後一柳井瀬一
之角乃瀬りとすは内々 柳井瀬戸のふま
あくとす所々河ふ此権現とすあり之丁
秘の山より多目のえり十町由きく
石多脚あり日まと右此郭二ツ河
乳乃すくありしはなるもの立郭より
切るとなる

又世下に多あり 先づ山依とて
つてころろに山依をいざすわ平一紀
前乃島系かんせん嶽とあるとす

世津戸先ハ小宮あり古道とせんく
ふむく 天宮一揆此よりおつま
一揆とあるとす

島系此物先物此角溪

けふくかんを起板を立るると然乃石山あり

乃定ありあうく内々石像此親善あり
道あり 石此合をすつくとに元附
やうく 古くこれと集積ハあり
何とすを智人なり

薩長公あり道出あり

世亦此風伝き薩州此内々之とも風あり
か時代の世亦の今士二百人なり
同名於大小川とて うち道あり
是より如以尾より一車 吳凡あり

事と云ふこと一江戸迄五一
新い中い志うれハ尚時薩長とふ不
出海と長七け建い何る今もす
わいふかすす

長崎申来北紀

抑北前彼神那性昔之江浦と中不
之文治ころ和朝より其家小左衛門
云者この娘江浦とあまう磯倉より
ち山といらき谷を地と耕作とわい

漢文のりぬり物より天又北右乃小左衛
孫高た富つ中山家来あまう妹孫
去徳寺山北頂とて城を搦其武彦其之
をふよりたひ一合戦と戦といふ
一交七ふ笑と云ら日あゝ其我登ん
よりさすりふ当天正のころ小左衛南重
船渡海とて高貴と事うせやま丹と
弘み海とて所地小繁昌なり其在島
交く進めりいへる一而水引廿日却る

不登のやつとありいさく討と道と
軍務をいし向事しとて、陸動す物と
さうろ町あり山田甚吉とふりのを取と
しと軍務とてはと六百余人とて
大手北のち打破りかきならんとせし如と城
中の者しと決地おとせしと
五戦ひとて、強山より西急坊とて
山伏をたてしと合せ前後の町と
務をいしとせんくせめ戦討はとて

余人討死とて、その後甚なる所あり
あせ合戦とて、甚なる侍あり
智神とて、金堀坊とて、大カ北勇士
二人町の、暗地内より、作賀信言と
あつと、ふりとの討とて、あつと、敗
少と、あつと、軍とて、城とて、あり
是と、町あり、甚なる、城、後、とて、
たつと、ふりとのとて、ありとて、

肥前隆造吉 隆信 幕下 源 隆 茂 亮

一 町方合戦此事

天正六年甲寅之月茂宅の甥七百余人
赤松町方勢四百余人とかけ合 一割
戦へし一交も級如きも茂宅甥も世免
所へ之船軍とあり一割は少く船と
まのしつゝ出れり右方夫を志すは
如く茂宅甥大に級軍一割を乃ち
文に別寄次されしと世の乱事一り
れを全國に在りしと子に入れんと
別

ふの町方へ是よりあり町方入口場を
なり統とくまに決地右大夫安重にかまへ
あり

長崎へ船と南無船来りし

一 天文乃以 神宮高貴此大隅種り一海
平戸上島以り長崎へ来り此地に
海より唐之國を渡り此海あり河
風より一やありふり形一是より
毎年世にあり大村及ぶ家来及ぶ

對言と 予の書し 在る 濤く あり たり
十九ヶ年 此後 天正十三年 申す 故と あり
口自 乃 响ハ 瑞島 飛澤 寺 也 此ヶ 寺 文 派
云年 小 由 寺 新 寺 派 志 摩 寺 也 是 瑞島 如
天正 十六年 秀吉 西國 島 津 大友
也 征 伐 あり 也 由 此 寺 也 龍 前 の 衆
邊く 若 以 時 伴 王 達 の 僧 也 此ヶ 寺
途 中 迄 此 寺 あり 也 此 寺 宗 門 此 寺 あり 也
と 寺 傳 者 由 之 あり 也 あり 也 あり 也

道一 下 彦 州 捕 獲 寺 八 幡 此 寺 あり
樂 比 寺 皇 付 天 連 此 寺 あり 也 是 國 へ
遷 比 之 一 吉 利 寺 あり 也 十三ヶ 寺 破 却
後 教 師 創 始 寺 也 一 也 此 寺 法 度 あり
御 定 目 也 八 幡 寺 也 一 也 是 寺 也 略 之
秀吉 公 也 寺 目 あり 一

一 尚 不 御 之 故 也 此 寺 上 八 幡 寺 あり 也 あり 也
あり 也

一 公榜に由り相細下中より相及ふ事
 尚所に候も在り人にて信有る事
 瑞穂郡深草郡西郷河も又取意
 一 黒船に事ハ前々此れくく言ふ事
 一 此れ迄南西へて相付事
 一 自然にきてふ謂分中在る者有る事
 一 一切に引取有る事
 右に在る事有る事にかゝるハ急度人
 方へて中候言事有る事との事候件

天正十六年五月十六日

戸田西ア少輔務隆
 浅井彈正少弼忠政

秀吉公御来下

在候事思知ぬ事と相名に致事買事らひ
 尚此より事に成所免臨事候
 深草少弼西ア少輔下事

天正十六年六月十二日

長崎中

長崎修理長崎島沖より南蛮船焼打

事

慶長三年に改竊系に成多有馬修理長崎代官船
仕立伽羅を潤く廣南へ渡海せし如る人
聲人居不馬川に吹舟ら此逗留の時多ん
らん人々口論り及ひ多勞を此ハみふ事
世に道船七集し之不集るれしは海客の心也如

慶長十三年天川より南蛮人殊多長崎人高
貴海客右に如る多すおまひ是船竟此
事と心証戸に証へま。軍船とて船軍と多
しころ右大矢おまはまはとまらるる事付
なき如く船より水やとと事少人故に船
うつり自に南多と音ひと切ちりし之大船底へ
迎込るんせりと大移りゆらるる雷北とく
暫時此うらとふ証し南蛮人皆焼死
多馬及船自よりひとらるる事

町人濱田孫三郎言砂浜海を治るる

寛永承以比多砂を阿葉陀おふりよふ
住居は 然るに寛永十四年 末次者孫
とふまの船と付言砂浜へ小船と福列
京をあり 如おらん とも金銀を棄てたり
言款 二人死に人と連系し 船は如
十五年辰乃 幸孫多浦畔 新嘉 孫多浦此方
小丸魚と 中丸者右此島の三人知ふ 三十人福人

船より百艘の姿、如星多砂、海濱へ
登ころ船より 登り中丸 孫多浦へ
乃この中丸 孫多浦へ ありはのり 孫多浦
とて孫多浦と徳と 孫多浦 中丸 孫多浦
上陸のころ 孫多浦 孫多浦 孫多浦
此心より 孫多浦 孫多浦 孫多浦
とんぬ 孫多浦 孫多浦 孫多浦
孫多浦 孫多浦 孫多浦 孫多浦
孫多浦 孫多浦 孫多浦 孫多浦

多岐の事と小左衛門新藤はけりとの事
しぬぬきは違ひ一月の折にそつ暫時
十に五人切つてしゝ如常迎石火矢とけ
りしゆきと如く、孫兵衛大番長と申すは
石火矢と故しゝりかゝんせゝゝこり
也しゝりしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の如くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
身まゝもつやまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぬはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

子島亦く紅毛人殺三人とかひゝんゝ之の中は
悪船の乗目おゝゝゝ日中へ帰國つゝゝゝ
ゝゝゝ

一 阿蘇院かゝん人三ツウトラル乃子十二也
外家は十人ゝらゝゝゝ大村へきゝ筆全
翌年子ハ病死也亦のよゝハ四神
り
南蛮船四艘ゆゝ事 其後切交舟御
別禁南蛮かゝんゝゝゝゝゝゝゝ

為國之由一也信山之事

一 元龜元年(1572) 寛永十三年(1636) 宗廟の事
不抜素人(素行) 宗廟の事
りふー 宗廟の事 十八年 癸丑(1631) 宗廟の事
大久保(大久保) 宗廟の事 十九年
山口(山口) 宗廟の事
丹波(丹波) 宗廟の事
天連(天連) 宗廟の事
押井(押井) 宗廟の事
宗廟の事

衣通(衣通) 宗廟の事 二人(二人) 宗廟の事
南(南) 宗廟の事
親(親) 宗廟の事
宗(宗) 宗廟の事
名(名) 宗廟の事
寛(寛) 宗廟の事
宗(宗) 宗廟の事
天(天) 宗廟の事

部百八拾七人天川へ渡り

侍立八人供与百十八人

世時大村の旨圓の傳 是時三百余人船に載りて

寛永十三年 江戸 由桑目 舟に載りて

一 英國人日本に船を以て來りて

一 日本人英國へ去りて來りて

有るは其の科を船に載りて

去りて來りて

一 英國の海軍は居日本人に來りて

死羅に中たり

一 切支丹の宗方有るは彼人の中を以て

事

一 切支丹の海軍は居

一 伴天連の海軍は居

世より前よりかくありて

一 英國船が江戸に來りて

ゆりて船に乗りて

一 伴天連の宗方 廣く南蠻人

有る時其の如く前大村に宰へて入る事

一 伴天連の事 北中へ改定入る事

一 南蛮人の子孫 日中にも金銀堅下り有り

其令遠者 殊に族有るる 其証一紙と云
科の控をて下り有り

一 南蛮人の長崎に居る子 其母あり子と云

内養子 信長に父子の志 此証と云る事
命をて下り 南蛮の事 自然の如く
之内事と云 日中へ其の証又其書無事

波少者有る事 如人も勿論死罪親類も亦ハ

波少者有る事 如人も勿論死罪親類も亦ハ

一 波多一泊り 其証 信長に事

一 武士乃西へ長崎へ 其証 毎高物 其証 人々

其証 其の買死り 其証 信長に事

一 英國船荷物 其証 与江戸表へ 其証 人々

其証 其の買死り 其証 信長に事

一 英國船積立 其証 其証 其証 其証

五ヶ所を以て外船符之取割符之事

一 糸之外船符之取割符之事
賣買之仕合度船之小舟之事
下付之事

并 荷物之取割符之事

一 英船房之取割符之事
九月廿日取割符之事
英船房之取割符之事

并 取割符之事

少一取割符之事

一 英國船房之取割符之事

一 英國船房之取割符之事
下付七月廿日取割符之事
下付之事

一 英船房之取割符之事

以上

寛永十三年八月十九日 加賀守

書後書

伊豆守

後攻書

大炊頭

柳原飛騨守

多場守左衛門

鴻巣天守一揆之事

一 寛永十三年七月 鴻巣乃天守並田中守と
 以ふとの御京名に張申人浪黨と集る
 一 揆と天守をかくし 其の隙天守を
 与次と藤代に居城を唐津より
 名代より 三宅を藩留置の城と書
 加乃一揆き 山に 隙に 手なると
 一 隙に 隙に 手なると 叶と
 一 隙に 隙に 手なると 叶と

す之ひ此勢あり一揆と 船軍あり一揆と
鳴る北城の蓮り 長崎へはしるし川の中
子月々おろく女をくしる 後重なり
よく二月九日大名小川中知三月板倉及
洲上役より一月 元日付死しひ是
うくく うさ 筋く 杉平伊豆及戸田
左つ及杉平志下及山下知 二月 落城
杉平伊豆及重北城世々不御帰陣
長崎へはしるし 山嶽岩八未次 年 終

宅所年寄乃重の斗り 一 島ハ一揆
長崎へはしるし 川の中 船軍あり一揆
とす 救おろく女をくしる 後重なり
板倉砲玉業細引 大工船匠此は川用 此
はしるし

江百塔寺三百目

一人重初より 鴨川 及多活しつゝの川上大
法水石堂と中まのりて 城根ありを元り
路ありつゝのりて大山の崩通中へ

今更速仕く付しひん中さんと定あり
人をも款方すい進るしむ之定と
ありをとそしつるやこふしつるその
誤玉を小浜の河

本石大矢

古六百

兼百斤入

今小あふそ

誤玉を方千族斤

一河一尺八寸

一 平戸へ着し河葉泡船をしし勢石大矢

をうくせししつるやこふしつるその

一 かの浜田跡吾雨下古石大矢と折せし

去御臨水しつる細川殿へ方新張しし

しつるやこふしつるその

一 柳系形強弓及江戸へ古関一城此一處あり

法也しつる

生國祀前室於那江邊村百姓甚氣子

一 橋系一揆強中人善田守節首

一 四節始しつる

一 以節始大矢時小たし

一 大矢時 堅あそ

以上

長崎の鴻大の前の掛

一 東の城の世のあそびの記は長崎石大矢のたきり

山登り莫くししに砲丸を色

一 砲百枚

淡田新島

一 日お拾枚

六永十左衛門

一 日三十枚

海軍市左衛門

門の指板

某師古久左衛門

日お拾枚

石大矢の侍者

以上

一 秀吉公

槍現様

台徳院跡 志々良團へ

日本より所欠より 高船等の御免を承りて

乃上より 美より

大崎院跡 西代柳原

御弾書及山王御之長巻く山信山より

日本吳國海之船教之舟艘之

一 長崎

未次 年終

北渡

船中 年終

冬渡

船中 年終

夏渡

船中 年終

秋渡

船中 年終

春渡

船中 年終

冬渡

一 堺

伊勢也

日川

一 南京 二百四十里

一 水口 二百四十里

一 吉列 二百四十里

一 船山 二百四十里

一 福建 二百四十里

一 紗堤 四百三十里

一 房東 四百三十里

一 湖洲 八百里

一 文址 八百里

一 東草 六百三十里

一名高砂 又名高砂

一 南 二百四十里

一 水口 二百四十里

一 廣 三百三十里

一 普陀山 四百三十里

一 福建 四百三十里

一 廣東 八百三十里

一 房東 八百三十里

一 湖洲 八百里

一 東京 子三百五

一 古帳 子七百五

一 六花 子四百五

一 埃唱也 子三百五

一 東浦集 子八百五

一 古泥 子四百五

一 蓮簿 子四百五

一 莫前所 子八百五



一 南寮

一 三キリス

一 阿蘭陀



